

Métier de la philosophie clinique

臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために

1998 12 9 《創刊号》

大阪大学文学部臨床哲学・倫理学研究室

目次：巻頭言 中岡成文	1
特集「学校を考える 『不登校』という現象を通して」	2
不登校を語ること 不登校の「私」性 栗田隆子	2
学校という「踏み絵」 畑 英理	9
誰が「なぜ学校に来るのか」に答えられるのか？ 寺田俊郎	12
ディスカッション	17
発表を終えて	25
セクシュアリティに臨む哲学 本間直樹	27
臨床哲学的空間	28

巻頭言 臨床哲学のメチエ

中岡成文

私たちの研究室（大学院）は、今年度から「臨床哲学」を名乗り、看護・教育の経験者である社会人の方々を受け入れました。臨床哲学の授業（金曜日午後6時より）ではケアや看護のことを中心に議論し、臨床哲学研究会（公開）では教育のテーマを設けてアクチュアルな問題にコミットすることに努めています。それに合わせて、院生の多くは、医療研究グループか教育グループかに属し、臨床哲学の創出・展開にそれぞれの立場から参加しています。本号では、教育グループの活動が中心に報告されていますが、

医療研究グループも事例検討に、老健施設の見学にと意欲的に取り組んでいます。

臨床哲学のプロジェクトはまだ始まったばかりです。＜現場＞に出ていくということも、自分なりの＜現場＞を作り出すということも、容易ではありません。でも、これまでの哲学、これまでの大学、これまでの制度的・職業的ケアに安住するのがいやなら、道のないところに道を通していくしかないのです。挑戦的にこういしましょう。真理は＜発明＞されなければならない、と。

（なかおかなりふみ・教授）

特集：第1回臨床哲学研究会（7月2日（木））報告集

学校を考える 『不登校』という現象を通して

イントロダクション：臨床哲学研究会も今年で4年目を迎え、これまで毎回異なったテーマのもとに様々な現場の問題について議論してきました。今年度の研究会では「教育の現場」にフォーカスし、「不登校」という現象を通して教育の現場が抱える様々な問題に継続して取り組むことになりました。そこで今回の研究会では、当研究室の院生と研究生に、不登校者本人の視点、親の視点、教師の視点という複眼的なパースペクティブから発表をしていただき、一面的に語られがちな不登校の問題を多面的に映し出すことを試みました。本特集では3人の発表とディスカッションの抜粋を収録しました。（編集部）

不登校を語ること 不登校の「私」性 栗田 隆子

(0) 「私」のアウトライン

私の不登校について話す前にまず私の友人の話をしたと思います。

私が中学三年のころに、転校生としてやってきたその人と、友人になったのですが、その人はしばらくして学校に来なくなりました。「経済的・身体的な理由ではない長期欠席」、つまりは不登校（そのころは登校拒否という呼ばれかたが一般的でした）でした。私はその頃その人について「弱い人」だとか怠けてるだとか思ったことはあまりないと記憶しています。その人を不登校をしているという理由で嫌った覚えはないのに、「不登校」を私自身が経験したそのさいに、なぜ、あんなにも動揺し、自分のことを弱い人間だと思ったのか、と苦々しく感じます。

私は、すでに中学二年のころから学校に行ったり行かなかったりを繰り返していました。けれども本格的な不登校、自分の学校やその他のことに対するいままでの「価値観」をゆるがすような不登校をしたのは高校一年の時です。その年の九月にいったん「休学届」を、その翌年の三月には「退



学届」を提出しました。その間に、知的障害の人の通う作業所（畑仕事を中心とした）にボランティアとして通いはじめ、結局二年間ほど、その作業所にお世話になっていました。ボランティアというより、私の方がケアされていたという思いが強く、お世話になった、という表現がふさわしいです。

そのスタッフの方でが不登校の経験をしていたという人がいらして、その人が通信制の高校を卒業していたということもあって、退学届けを出した一月後の四月に、通信制高校に入学しました。

そのころは大検ということは考えてませんでした。なぜなら、そのころは大学に行くために高校に行こうとしたからではなく、高卒の資格が欲しいからでもなく、高校の勉強がしたいと思ったからです。そこには、国籍もさまざま、年齢も上は七十から下は十代半ばまでといろいろな人が在籍していました。大人の方の勉強熱心さにおどろき、

彼らから私も「勉強」というものに対する「能動的なありかた」を学べたと思います。

通信制高校はとにかく自分の時間があるところで、地域の公民館で開催される講演会に主婦の方にまじって参加したり、作業所でのボランティアの他に、看護助手のアルバイトも経験できました。それからは、多少の紆余曲折はありましたが、とりあえず今に至っていると言ってよいでしょう。

さて、それではこれから実際に私が不登校をしたうちで、何を感じ何を迫られたのかという話をしてゆきたいと思います。

(1) 不登校を語る際に

「私」にこだわる理由

私自身が、不登校（私が経験したころは「登校拒否」と呼ばれることが多かったが、ここでは名称の違いにこだわらない）をしたときに辛かったことの一つは、不登校をしている人間ということ、一定の枠にはめられて自分が見られるのではないのかというおそれでした。しかも、その不登校をしていることによって「悪人」「怠け者」というレッテルが貼られてしまうことを恐れていました。先程話したように、友人が不登校をしていることに対しては悪いことを彼女がしているとは思っていなかったはず、なのに、いざ、自分が経験すると非常に悪いことをしているような気持ちになりました。私自身の価値観がそのような価値観の枠組みに縛られて、身動きがとれなくなってしまうことがもっとも問題だったと思います。

マスメディアなど、教育をめぐる言説はともすると「こども」「高校生」などと言葉で区分けすることで、その子どもなり高校生なりを「十把ひとからげ」に括る視点がつきまわっているように私には感じられます。「不登校」という言葉もまたそれをしてる人をすべてひとくくりにし、個々の豊かな生、苦しみ、喜び、を感じる一人の人

として生きているという事実を見えにくくさせてしまうようです。

そこで、私は、「私」の不登校、すなわち「私」性にこだわることによって、不登校をしているか、していないかという視点だけ子どもをみるような「枠」を取り外すことができたら、と考えています。枠を取り外すということがとりもおさず、不登校をすることが良いとか悪いとかを言うだけの価値規準で考えることから、一旦は抜け出すことができるのではないかと私は思っています。

まず不登校ということが誰の、いかなる問題であるかということが、話しをする上では重要であると思います。というのは、あとでまた触れますが、不登校にかこつけて違うことを主張しているケースもあるからです。私は、この問題の「現場性」から離れる言動をしたくはないと考えています。まず、私は本人の立場として、不登校がいかなる問題であったかを話していきたいと思います。

(2) 不登校する子どものなかで

内面化する「学校」の価値

a. 「不登校」であることへの 極端なおびえ、嫌悪

私自身が、不登校（もしくは「登校拒否」）をしたときに辛かったことの一つは、不登校をしている人間ということ、一定の枠にはめられて自分が見られるのではないのかというおそれであると言いました。ある意味で、不登校を「悪」と捉えてしまう傾向が最も強くみられるのは本人の心の中だともいえます。不登校が「悪」であると思うからこそ、「悪」ではない、「病」であつたらいいと思ひもしました。実際に病に苦しむ方に失礼であると思ひながらも、病という、ひとから認められる「居場所」

自分の状態が「こうである」と表現できる言葉のあることがうらやましかったのです。しかし、私のからだは「行くべきである」という気持ちを無視するように動けなくなることもまた事実でした。

実際「行く」「行かない」でなぜここまで葛藤が生じてしまうかといえは「行きたくない」という気持ちと同じくらい「行かなければいけない」という気持ちが根深くあるからです。これは「学校が好きだから行きたい」という欲求の気持ちではなくあくまで、義務のような気持ちです。しかしとにかくその「行くべきである」という気持ちが強かったことは事実です。

「行かなければ」と思っている場所に「行きたくない」という自分の気持ちを認めることは、本当に勇気がいるとしかいいようがありませんでした。なぜなら、自分の居場所は、そこしかないと思っているのに、その居場所に自分がいたくないと気がついてしまったら、自分の生きていくなかでの居場所がない、という結論が生まれるからです。「行きたくない」という主張、または、「なぜ学校とは行かなければならないのか」という問いが、そのときなぜ出来なかったのかということに話したいと思えます。

b. 自分の主張を訴えるための 「前提」がない

「問う」ということは当然、問いを聞く相手の存在を考えなければいけないと思えます。というのは子どもが問うその相手とは大抵子どもと同等の立場のものではなく、力が上の相手であるからです。その相手に問うということは、非常に「力」のいることで、その力というものが子ども自身だけで、生み出す方法があるのかどうか、それは私にはまだよく分かりません。

そしてもうひとつ、問うということに意味があり、それは無視されるべきものではないのだ、という価値観が浸透していなけ

れば、子どもからの「問い」は生まれ得ないのではないのでしょうか。問いが生まれ、そしてそれが表現できるまでになるということは、まさに教育の賜物のような気がしてなりません。

ここで、さらに具体的な話をしたいと思えます。

私は、高校受験の三ヶ月ほどまえ母に進路の話をするときに「定時制に行きたい。普通高校にはあまり行きたくない」と話しました。

母親はそれに対して、「何いってるの」という調子でまともにとりあってもらえなかった覚えがあり、私もそれ以上言葉を続けることが出来なかった記憶があります。母は決して悪気があって私の話を聞こうとしなかったわけではなく、ただ、そのような投げかけが彼女には、まったく信じられないものだったからでした。これはのちに母親自身がそのように私に話してくれました。学校の先生にはそのようなことを言うことすらできませんでした。それは、先生にそのようなことを問う密接な関係が築けなかったからで、その当時、私はそのような先生のあり方を、恨む気持ちはありませんでした。目立った部分もないそれこそ“普通”の私に興味がないのが当たり前だろうという価値観を私自身がもっていたことにその原因があると思えます。

私のまわりでそのように「問う」ことの「意味」を考えているひとはほとんどいなかったように思えます。少なくとも私にそれを教えてくれたひとはいませんでした。それについて弾劾することは避けます。今まさに不登校に直面している子どもの親、教師を責めたてても何の解決にもならないからです。

ただ、そのように「問い」の切れ端を投げかける相手が現れた場合、どうすることが必要なかを周囲の大人は考えなければならぬと、いまの私は思います。ただ、それが問いであることに気づくことができない、そういう事態がまずは起きることも

考えられます。それをどうすればよいのか、私にはまだ、その答えは出ません。

問いというものがなぜ、軽視されてきたのか、また問うことそのものの意味をまず把握し、そしてどの様に教育していくのかということがこれからの課題なのではないかと私は考えています。

c . 問うことの出来ない「学校」 の持つ意味

私は、小学校から中学校の半ばまでピアノや水泳などを習っていました。それは、とても私にとっては楽しいものでした。というのはどちらも「好き」なことだったからです。なぜ問うことの出来ない「学校」の持つ意味、を話すにあたって、このようなピアノやスイミングスクールの話をするのかといえば、私はなぜ、このような場所を自分の居場所として大事に出来なかったのか、なぜ、学校に居場所を見つけようと悪戦苦闘し、その結果ピアノやスイミングを好きであったにも関わらずやめてしまったのか、がとても気になっているからです。それは先程申しましたように、価値観の問題が考えられます。私の場合、学校にいるということは非常な労力を使うことで、水泳やピアノにまわすパワーがなくなってしまったのです。なぜそんなに学校にあわせなければならない、と強迫的に考えていたかといえば、「好き」なことをするというのはこの人生においては意味がない、嫌いなことを耐えてやることで始めて「力」がつくのだ、といえれば驚くほどストイックなことを考えていたのです。さらに学校というものが家庭や、他の習い事などの「居場所」よりも「大事」な特別な場所なのだと考えていたのです。

嫌いな学校に無理矢理行くことと自分の価値観との「折り合い」をそこでなんとかつけていたのだと思います。皆さんも私の話を聞いていて気づかれたかもしれませんが、私はわりと「価値」ということにこだ

わりを持っていた方だと思います。そこが不登校をする人間にありがちな神経質なところなのだ、といわれてしまうかもしれません。不登校をしている人間が、なぜ不登校をするのかといえば、そのひとの性格にも原因があるというのはある側面において真実です。ただ、その際にその性格が即「悪い」ものであること、そして「不登校」という行動が即「悪」であるという枠組みを取り去った上で指摘するのであれば、の話です。なぜなら、学校に行っている人であつても神経質であつたり、こだわりを持っている人がいるわけで、それなのに不登校をした場合、まさに「不登校」をしたというその事実があるゆえに、そこから神経質であつたり、性格の短所がことさらクローズアップされる、その性格が「不登校」の原因として語られるのは、非常におかしいと感じるからです。

(3)「不登校」(登校拒否)する人間の 感じてしまう居場所のなさ

a . なぜ、死をかんがえるまで 追いつめられていくのか？

不登校をすると(十年以上昔に不登校をした場合は特に。親のせい、本人のせいといった見解が主流であった時代であったので)かなり追いつめられて、死を意識するひとも多いとおもいます。このことは通信制の高校に進学したときクラスメートと話したことのひとつでした。彼女が「失恋なんかどうってことないよ、この苦しさに比べれば」と言っていたことがとても印象的でした。不登校になる、ということは生きていく「前提」の根源がなくなる、足許の崩れ落ちる感覚なのです。

不登校に関しては「行きたくても行けない」という表現がよく使われます。私が最初に親に口に出していったことは、この科白でした。「行きたくない」という(実は本

音の) 自分の気持ちを無視をすると、あたかも身体がそれを忠実に私に知らせてくれる役割であるかのように、体が動かなくなりました。だから「行きたくても行けない」というより「ほんとは行きたくないけど、自分の居場所はそこしかないから、行くべきと考えおり、だから行きたい。しかしもはや体が動かない」という表現が私にとっては適切でした。この「行きたくない自分」というものが象徴する価値観、生き方はとても恐ろしいものと思っていたのです。そのような生き方はこの社会のなかで生きていくことのできない「破滅」的なものと感じたのです。まっとうな生き方の出来ない自分には何の力もないと思う、学校に「行けなくなる」くらいだから何をしても駄目だと思ふ、自分と学校をとりまく人間が愛せない、ひいては死んだ方がよいのではないかと考えが繋がっていったのです。しかし、そのような学校至上主義的価値観はいったいどこで身につけたのか?ということが問題になっていきます。それがこれからの論点となります。

b. 周囲との関係

私の場合、友達間のイジメや齟齬というものは、いつでもつきまとうものでした。もちろんそれも辛かったのですが、それは私にとっての本格的な不登校にはつながりませんでした。ただ、中学の時は、「年間欠席五十日をすぎると、教育委員会に報告するか、職員会議にかかるか、ともかくなにかが起こる」ということを聞いたことがあったので、それを数えながら休む子どもではありました。しかし、そのときなぜ本格的な不登校をしなかったかと言えば、先程言った「ストイック」な価値観のおかげ、学校に行くことが自分のためになる(それがどういった、ためになるのかは考えもせず!)と思いこんでいたからでした。

不登校をするきっかけというものは、一応あります。しかしそれは一見とてもささ

やかに見えることです。それは何かといえ、母の高校の卒業生が書いた文集を読んだ、ということでした。

ひとことで言うと彼らはとても「自由」なく(それはただ、明るい青春をおくっていたというだけでなく、暗さのようなものを抱え、それを全面に出してしまうようなタイプの人でも、その学校には居場所があったという意味の「自由さ」なのですが。ちなみにその高校はいわゆる進学校でした。)高校生活を送ってきたということをそれぞれの筆致で書かれており、それが私のいままでの学校生活、そしてそれほど進学校ではない私の高校とはあまりにもかけ離れており、茫然としました。

しかもその人達は現在はこの社会に居場所のある大人として生活ができていると知った時点で、私の「学校」に行かねばという気持ちがそれを読む前より薄れてしまったのでした。自分の受けた苦しみをいままでは「必要なもの」「意味のあるもの」と思いこんでいたのに、それが崩れてしまったように感じたからです。しかしそこから、私の本当の気持ちと「すべきである」という義務の気持ちとの葛藤の始まりでもあったのでした。しかしというべきか、やはり、というべきか、そのような「自由」な高校生活をおくった私の母は、私のそのような学校に行きたくないという気持ちを最初はなかなか理解は出来ませんでした。むしろ私があまりにも追いつめられた様子でいるのを見て「死ぬよりはましだから」という理由でとりあえず学校に行けとは言葉で言わなくなりました。(ちなみに父親は最初から最後まで何も言いませんでした。いまでもきっと私の不登校ということがなんだったのかわかっていないかもしれないが。)高校の先生も、最初から最後まで理解できなかつたようです。私自身もそのころはまだ、自分の気持ちを整理できるほどの力もなかったもので、ともかく無事、休学、そして退学ができればよいとしか、考えられませんでした。実際、彼らは「悪気」が



なく、一生懸命だったし、彼らに対してあまり何かを言うことが当時はできませんでした。余談ですが、私は退学届を出した、最後の日、あの恐ろしくて入れなかったはずの教室に入り、「高校を今日でやめます」とクラスメートに宣言しました。それは、なにか反抗心のような気持ちだったように思えます。「退学の挨拶を礼儀正しくする不登校の学生」という奇妙な行動をとることで、一括りにされる「不登校」の枠をとりたかったのかもしれません。

話を戻しますと、つまり周囲の人間は「悪気」がないからこそ、私の「違う生き方」というものに気がつくことが出来ない、また違う価値観があるということに気づけない。「無意識」で私を自分の物差しで測っていたという感じでした。本当に悪気はなく。だからこそ、私も「親が、教師が、友達が悪い」と言えなかった。それにその彼らの抱いている価値観が私にとっては「違う」とも言えなかった。また「社会が悪い」ということも、それは結局自分の性格の悪さを人のせいにするのではないかと思ってそれもできなかったのです。

自分も悪い部分があると同時に私だけの責任ではない部分もあると分かり、反発ができるようになったのは、高校一年の秋に一旦休学届けを出した後からで、しかもその矛先はすべての責任が母親にあるとでも

言うかのように、母親にまずは向けられてしまったのでした。少なくとも、母親にあるのなら、父親にもまたある筈なのに。しかしその後は単に母親、父親だけの問題ではない、その不登校をとりまき、そしてその根っこにある社会の価値観とそれを受け取る個人の問題として考えるようになっていきました。

そして実際に不登校に対して社会的な差別がある、そして差別意識が個人のうちに巣くってる、と感じることは逆に今のほうが強く感じる場合もあります。私もきっと不登校をする以前は、その枠組みのなかで呑気に生きていたのでしょう。

私は通信制高校にその後進学し、それを説明するとき不登校であったことにも触れたりして人にあえて隠していません。すると、そのときは何も言わなくても、たとえば私は卒業するとき大学の教授に、しかも数人に酒の席で「栗田さん、大学院でも不登校にならないでくださいね」と彼らはあくまで冗談のつもりで言っていたからです。私はちなみに大学では不登校はしていないし、彼らは私の不登校の様子を知らないにも関わらず、です。私はそのとき、「なんで不登校をしちゃいけないの」と思い、返事はしませんでした。あと「あなたみたいに明るい不登校はいいけど、暗い不登校はいい」といった人もいます。確かに不登校には様々なかたちがあるのは事実ですが、良い不登校、悪い不登校がそのときの「暗さ」「引きこもりの度合い」で決まると言うところにはなにか、私を苦しめた「価値観」が潜んでいるような気がしました。それはある種の決めつけ、明るい子どもらしい子どもがいいといったような、ところがあるのではないかと、思います。

c. マス・メディアについて

別に「逸脱」をしたくて、不登校をしたわけではなかったのですが、しかし、マスメディアにおいては不登校も逸脱行為、問

題行為であり、野放しにしておけば大変なことになるといった書かれ方がされていたりします。それによって「私は大変なことをしている問題児なのだ」とマスメディアの価値観がまさに自分のものとなってしまう、まさに「不登校フォビア」となってしまう。いま、実際に不登校をしている子どもの人生を力づけてくれる言葉というものが、どう生まれてくるのか、とくにマスメディアのなかで、そのような言葉は生み出せるのか？と少し意地悪に思うときもあります。不登校を語っているようで、じつは違うことを語っているような言説が多く、それをすべてなくせ、とは言いませんが、ただ不登校をしている子どもにとって、それがどういう影響を与えるのか、力になるのかどうか、という視点がもう少し欲しいと思っているのは事実なのです。

(3) いま思うこと

ここで私の語ることの意味

私は、「不登校」を経験しました。しかし「不登校」が私のアイデンティティの全てではありません。そこに、凝り固まることは学校と言うところでしか結局自分の居場所が見いだせない過去の私と大差ないように思え、むしろ心理学・教育学とは違ったところに身を置きたい、もっといろいろな言葉で自分を語れるようになりたいと思って哲学を選びました。まず、私がこのように公の席でみずからの不登校を語り、自分である程度納得のいく言葉を紡ぎ出すためには時間が必要で、まさに十年近い歳月が必要だったのだといえるかもしれません。それがまず「今」私が不登校を語る理由の一つです。

この前の日曜日に、「学校に行かない子と親の会」というところに行ってきました。私は、やはり「不登校」というところで苦しむ、そのお母さん（お父さんも若干名いましたが）たちとは、違う立場であり、私

はもはや自分がその現場にいた時代からは隔たってしまった（自分が親になるかも知れない未来にはどうなるかは分かりませんが）ことを強く感じました。

言いかえれば、不登校をしていた「私」はもはやいまの私ではないのです。不登校をしていた「私」は私の中の他者なのです。その他者をみつめ、その他者の言葉を紡ぐことが、実際の他者を見つめるということに、しかもそれは自我の延長とすることではなく、他人そのものとして見つめるということにつながればよいと思っています。ただ、いままで話してきたことは本当に私個人の話で、それがどこまで、他人と繋がることのできるものとなるか、また不登校の「私」性を大事にすることが、他人の「不登校」を理解することにどうつながるかという問題もあります。

当事者 -- 「私が不登校を今している」 -- ではない、しかし「不登校をしている私」は最も近くにいてもいえます。その「私」は私の中の<他者>と言い換えられるかもしれない。その<他者>を常に意識するという「不安定さ」こそが、現場や思想にとっての「力」となるのではないかと考えています。ただ、それがなぜ力になるのか、また果たして私が考えるように力となりうるのかということは、これから十分に考えていかなければならないでしょう。

そしてこの場合の他者とは標題に上げたように子どもという言葉で表現したいと思っています。子どもといっても実際の子どものではなく、ここでは、シンボリックなものとして使っています。子どもとは言葉を出せない、自分の表現を持つことの難しい存在を象徴した言葉です。大人としての私とその子どもは「対等な」関係ではないのですが、しかしその子どもなくして大人の言葉も生まれえない、その意味では一方的な関係ではないのです。その言葉が出なかった<私>とそこから言葉を持つ<私>との関係性をこれから考えてゆきたいと思っています。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』のなかの有名な言葉を最後に引用したいと思います。

「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなはいくらもない。)」

このような言葉は本当に子どもであった頃、心に響くのではなく、大人のための言葉であると思います。言葉を持たない、それゆえに簡単に自分の中から消え失せることもあろう、子どもが私の中でどう生き続けるのか、また生き続けることができるのか大人になった今問われているような気がするのです。

(くりたりゅうこ・博士前期課程)

と思っている、そういう矛盾したところに立たざるを得ない「親」の立場から、報告したいと思います。

また、彼はいまごく普通の中学生として通学していますし、彼自身、「もうこれから、あんなこと(登校拒否)はない」と言います。けれど、それで「問題が解決した」とか「登校拒否を克服した」というふうには、彼も私も考えていないのです。ただ、今はこういう状態、と言えるだけで、もともと「問題を解決」したり「克服」するような思考形態に最も馴染まないのが、この「不登校」という現象ではないかと思えます。

1. 「行かない」と「行けない」

彼が4年生の時、友人や先生をめぐって学級内でトラブルがありましたが、それは「いじめ」というようなものではなく、個人的な人間関係のねじれのようなものだったと理解しています。そのため学校を休みがちのこともありましたが、その時は、両親とも比較的冷静で、「彼にとって納得できる方法で解決するだろう」と何となく考えていました。

ところが、ある日、『学校の怪談』というテレビドラマを見てから「学校が怖い」「学校に行けない」と言って全く登校できなくなってしまいました。「きょうは学校に行かない」と言われても特に驚かなかつたのに、子供に「学校に行けない」と言われた時、今まで感じなかったような困惑を感じ、「これは困ったことだ」と思いました。

その驚きと困惑は、親だけではなく担任の先生にも同じようであったようで、事情をお話しすると、すぐに教育委員会のやっている「教育センター」というところでカウンセリングを受けるようにアドバイスを受けました。他の地域でもそういうシステムになっているようですが、特に小学生の不登校は、一種の「発達障害」とみなされ、

「学校」という

踏み絵

畑 英理

今から5年前、次男が小学校4年生の3学期に「不登校」状態になりました。その後、約2年あまり、断続的に学校に行ったり行かなかったりする状態が続きました。理由はさまざま考えられますが、何か一つを特定できるようなものではなく、複数の要因が重なった結果と思われる。

その時「登校拒否をしている子供を持つ母親」という立場に立たされることで、それがどのような言説のなかに置かれているか、社会から何が要求されているのか、身を以て体験しました。

また、「不登校」という表現をとおして息子が訴えていることに、一人の人間として応えたいと思う、けれどまた、彼の自立に責任のある立場からは、やはりこの社会の枠組みのなかで生きていくことが望ましい

専門家によってカウンセリングを受けることで、親も教師もその「専門家」の意見を参考に、子供に接していくことを求められるようです。

その時、私は「教育センター」というものの介入に、非常に警戒感を持ちました。多少、こちらの思い込みがあるかもしれませんが、「カウンセラー」が「教育委員会」に所属していることへの疑問がまずありました。もう少し、自由な立場の方が、公平にものが見られるのではないかと、思ったのです。また、その「カウンセラー」が、教師や親に対してつよい指導力を持ち、「学校にもどす」ことを前提に主導権をもって子供の「カウンセリング」をする、ということへの疑問は、今でも抱えています。

もちろん、個別には「教育センターのカウンセリングがとてもよかった」という方がいるのも知っています。どんなものでも、一般化して批評することはできませんが、私自身としては、その時の非常に不安定になっていた子供がカウンセリングを受けることが、かえって「こころの内部ををいじる」ことになるようで、させたくなかったのです。また、「こうなってしまった」ことの「犯人」を探し、原因をつきとめることが、子供にも親にも良い結果にならないような気がしました。

それは、「彼の問題」が「不登校という現象」になってあらわれているのに、「不登校」という個別性のない概念のなかで「彼の問題」が語られてしまうことへの不安、と言い換えられるかもしれません。

先生には「この場で起きた問題なので、この場で、今までの彼を知っている人のなかで解決したい」と、改めてお願いしましたが、先生自身も「専門家の意見が聞きた

い」という考えのようでした。

2. 「不登校の子供を持つ親」が あらわすもの

さて、子供が学校に行っていない、ということになると、その「不登校」をどう評価するか、「世間」から問われている、と感じます。何か一方的に「子供の不始末を恥じる」立場に立たされ、「肩身が狭い」身の上させられているようで、「そうではない」と言うことに、とても大きな抵抗を感じます。その時の「世間」というのは、学校の先生であり、お母さんたちであり、ご近所の人、両親（子供の祖父母）母親にとっては夫でもあります。これは実はおかしなことなのですが、「子供の教育は母親の責任」という「常識」があり、最も身近な人から最も強い圧力を受けるようです。子供のことを気に病む以前に、多くの母親はこの「社会的評価」の前にくじけてしまうのではないかと思います。ぐらい、これは強いものでした。

一方、子供自身も、そういう「常識的な評価」の前にとっても揺らいでおり、「学校に行けない自分」をどう見るか、親に問いかけています。それは「自分への不安」から「承認」を求めていたのだと思いますが、本来親子関係に「学校へ行ける」「行けない」ということが影響するはずはないのに、彼の不安は、どこかで自分の存在の承認を必要とするような、根源を揺るがすもののように見えました。

こうして、「世間」というものと、自分の子供と双方から「問われる」ことによって、自分が無意識に持っていた「学校」を中心



とした価値観をあぶり出して見せられることとなります。今まで、私は、こういう社会通念としての「常識」から比較的自由であると思っていたのですが、自分が縛られていたものを見せつけられた様な気がして、その大きさに愕然とするほどでした。自分自身の内面化した価値観を揺るがす「自分の子供」とつきあうことは、どこかに「本能的」といいような抑制がかかっている、と感じるほどに、「自分の根源」も揺らぐような体験だった、ということができません。このようななかで、「親」としてできることは、私の場合、「問われる」ことから逃げない、というだけだったように思います。

人間は、何らかの社会的制約を受け、規範に従って生きることによって安定を得るものです。「学校」というシステムが子供の行動を全て管理しているような現状では、それをはずすと、自分を形成する枠組みがなくなってしまう。「不登校」の子供たちはそういう非常に不安定な状態に突き放されているように思います。「学校」以外の場所、家庭とか、共同体に、そのような個人の自由を越える「規範」が希薄になっていることも、要因としてはあるでしょう。

カウンセリングなどでは、親が子供の今の状態を「受容する」必要を説きます。親子関係はそれでいいかもしれませんが、「親の受容」だけではこの不安を解消できないように思うのです。

「あなたは学校に行かなくていいよ」と、たとえ子供に言ったとしても、それで子供の不安は解消されないだろうし、そう言う私自身が、「では、何が大切なのか」ということに答えられないように思うのです。子供の不安はそのように社会的なものです。

いま振り返って、その「不安」は避けるべきことではなく、「不登校」という問題提起をした自分自身の課題として、彼が自分で向き合わなくてはいけないことだったと思います。むしろ、「規範」として外を捜す

より、子供が「行かない」ことで「何を守ったか」を、自分のなかでみつけられればそれが非常に大事な糸口になるだろうし、こういう場面で、思考の道筋を自らたどる上で、「哲学カウンセリング」というものは有効な手段であるように思います。

3 . 学校と地域 学校への忠誠

学校に行けなくても、子供が同世代の子供に交じって、対等で自由な人間関係をつくっていける場があれば、「不登校」の問題も多少は解消されるのですが、義務教育では、普通「学区制」というものに地域ぐるみで縛られていて、学校に行けなくなると、地域の友人とも自由に遊べない雰囲気が出てしまいます。「地域の学校化」と呼ばれる現象ですが、私の住んでいる神戸市は、非常に管理されたニュータウンが多く、「学校」を中心とした価値体系に信仰のように支配されていると感じます。

こういうところで「学校に行っていない」ことを公言するのは、あたかも「学校」という「踏み絵」を踏まないことに等しいのです。この「体制」、またこの「支配」に、私は従わない、と言っているわけで、そのような「不服従」は、なぜか「反体制」や「非行」などの「反抗」より、罪が重いらしいのです。そして、この選択を公にすることで、親子ともに "Guilty" の烙印が押されるように感じます。

昨年の、神戸市須磨区で起きた少年事件は、特にニュータウンというものの「隙間のない」「息苦しさ」を象徴した事件であるように言われました。その時、この街全体にかかっている「学校の影」は、大変大きなものだったと考えられます。そのことについては、多くの方が言及しておられ、近隣に住む私自身としても、隙間なく計算されつくした街の息苦しさは日々感じていることです。

ただその街にも、生きている人々の生活

があり、人と人の絆があるはずだと思うのです。

あの事件が起きる1カ月ほど前、私は犬を繋いで郵便局で用事をしていました。外で鳴いていた犬の声がふと静まり、用を済ませて出てくると、ある婦人が犬の相手をしてくれているのでした。その方は震災で飼犬を亡くされ、仮設住宅に住んでいる方でした。倒れた食器棚のガラスが犬のお腹にささったこと、家は全焼し、避難した小学校の体育館で、ボランティアの獣医の方が、傷口から膿の出た犬の手当をしてくれたこと、10日ほど生きて、犬はその体育館で静かに息を引き取ったこと、などを淡々と語られ、「あんまり悲しいので犬はもう飼わないことにしたんです。だから、こーやってよその犬に慰めてもらっている。」と、話されました。

「少年」が、その同じ郵便局のまえのポストから新聞社への「挑戦状」を投函したこと知ったとき、私は何とも言えない暗澹とした気がしてなりません。確かに「息苦しさ」はあるのです。けれど、同じ場所が、そのご婦人と我が家の犬の「慰めあう」場所になっていたのも事実なのです。

地域社会がどんなに「息苦し」くても、それは所与のものであり、アウシュヴィッツでも、スラム街でも、ニュータウンでも

そこに人間が暮らしていれば、かならず友情もあり、「人間の自由と尊厳」があるはずです。私はその人間性の確かさを信頼したいと思う。けれどこの事件の場合、「学校」が「少年」の人間性を封じ込めたもののひとつであるように思え、それはなぜなのか、彼に世界はどのように見えていたのか、私には分からないのです。

「不登校」を起こしていた息子は「少年」と1歳違い、「学区」でいえば、隣り合わせの様なところに住んでいます。その「はるかな隔たり」と「意外な近さ」に息を呑むのは私だけでしょうか。

(はたえり・研究生)



誰が
なぜ学校に
来るのか？
に答えられるか

寺田俊郎

0. はじめに

教育現場の経験者として話題を提供することが私に与えられた役目ですが、この役目は私にとって少し荷の重いものです。というのは、私の教員としての経験はとても限られたものだからです。

私の主な教員の経験は、京都の洛星中学・高等学校に6年間英語科の教諭として勤務したことです。大学院時代に非常勤講師として3つの私立高校・女子校で4年間、

男子校で1年間、共学校で1年間 - で教壇に立ったこともあります。期間も非常勤も含めてたかだか十数年ですし、学校もかなり落ち着いた私立高校ばかりで、中学校で授業を担当した経験はありません。特に、専任教員として勤務した洛星中学・高等学校は、ご存じの方も多いと思いますが、関西では有名な進学校です。昨今マスコミを賑わしている問題、「いじめ」、「校内暴力」、「授業崩壊」、今日の話題である「不登校」という現象と、日々格闘したという経験はありません。

このような私がここで話題を提供するのは不適當かも知れない、という危惧を拭い去ることはできません。ですが、こうして話題を提供することにしたのは、現場の経験がある臨床哲学専攻の学生としての義務という、単にそれだけの理由でもありません。「不登校」という現象が、私の勤めていた学校にも件数は少ないけれども確かに存在し、やはり同僚の教員や私が戸惑いを感じるを得なかった事柄、他人ごとで済ますことのできなかつた事柄であり、教育を考えると避けては通れない事柄の一つだと思われるからです。

1. 「不登校」にまつわる私の経験

「不登校」という語を使ってきましたが、栗田さんや畑さんのお話からも分かるように、「不登校」といってもそれぞれの生徒で事情が違いますし、私が知っている事例も簡単に一括りにはできないように思われますが、「不登校」ということで私が思い浮べるのは次のような事実です。第一に、私の勤めていた学校では、病気療養などの理由がない長期欠席が恒常化していた、ということです。第二に、長期欠席には至らなくても、断続的に欠席を繰り返す休みがちの生徒、あるいは極端な遅刻を繰り返す生徒が今までなかったほど増えてきた、ということです。私自身は、長期欠席の生徒を授

業で担当したことはありますが、担任したことはありません。休みがちの生徒は、担任したクラスにはいつも数人はいました。

担任や担任団（学年団）の教員は普段から長期欠席者や休みがちの生徒に対して、色々な配慮をするわけですが、その事實は一般の教員には進級（卒業）の問題という形ではっきり意識されることとなります。これは学校によって違うと思いますが、進級規定によれば、欠席日数（遅刻日数も3日で1日欠席に換算）が要出席日数（授業日数から出席停止や忌引きの日数を引いたもの）の3分の1を越えた場合は、原級留置（留年）となります。しかし、校内で長期欠席が恒常的な現象となり、また「不登校」が一つの社会現象となっていて、文部省も一定の見解を示している今、長期欠席を単純に「怠学」とみなすことはできないのではないか、という意見があり、また、これからこのような事例が増えると予想されるから何らかの対策、たとえば、医師や臨床心理士などの「専門家」による判断があれば、例えば家庭学習の期間を出席日数に入れるなどの特別な処置を考えてもよいのではないか、という意見もありました。

その意見の前提になっていたのは、長期欠席の中には一種の「病的現象」とみなすべき事例がある、という認識だったと思います。「行きたい」、「行かなければならない」と思っているのにどうしてもいけないのは、やはり心身症的な症状であろうというわけです。これは、単なる「怠学」とそうでない長期欠席を区別するためには、わかり易い図式ではありましたが、私は一種の「病的現象」という把握は適切だと思いません。なぜなら、そこには本人の苦しみがあり、家族の苦しみがあるからです。ただ、その「病的現象」を一方的に本人の気質や家庭の環境のせいにするのは見当違いだと思います。もし学校というものがなかったら、あるいは少なくとも今のような学校のあり方がなかったら、悩まされずに済んだ病かもしれないのですから。

あれこれ議論はあったものの、結局どのように対処すべきか結論でないまま、今のところ従来通り担任と担任団の教員に委ねられています。たいていの学校がそうだと思いますが、クラスのことについては、まず担任が責任をもち、担任の判断と努力が尊重されます。担任は、家庭と連絡をとるなどして、できるだけ登校できるようにする方向で努力します。やり方は各担任各様で、私も関わった例としては、夏季休暇中に登校させて、補習をしたり語り合ったりしながら登校することへの抵抗感を減らそうという試みがありました。しかし、結局、休学ないし退学届けが出るか、原級留置となるかのいずれかがほとんどでした。そして、多くの生徒がそのまま退学します。

さて、私は昨年度(97年度)保健部長として一年間保健室で過ごしました。長期欠席や休みがちの生徒が増えていることに加えて、身体の不調や健康の相談以外のことで保健室に来る生徒が少なからずいることもあり、前任の保健部長に引き続き「心のケア」ということを考えてみようと思いました。臨床心理士など専門のカウンセラーを導入してはどうかとも考えました。(「カウンセラー」という役職はありましたが、一般の教員から希望を募って校長が任命するものでした。) こうした発想は、私の勤め先だけではなく、多くの学校に共有されていたものです。それは、「全国私学保健研修会」や「京都府保健主事研修会」など公的な研修会でも「心のケア」が相次いでテーマとして取り上げられたことからわかります。私もそういうところへできるだけ出掛けていって、スクール・カウンセリングに関する講演や実践報告を聴きました。ある高校の専任のカウンセラーの報告によれば、カウンセラーと養護教諭や担任団が連携して態勢をつくるのが大切だということでした。また、ある高校の養護教諭の報告によれば、非常勤のスクール・カウンセラー、養護教諭、担任教員、その他の関係教員が集まって毎週会議(一種の「カン

ファランス)を開き、成果をあげているということでした。それに触発されて、「不登校」やその他の悩みを抱える生徒をもつ担任教員を後方支援する態勢がつかれないかと考えましたが、在任中に具体化することはできませんでした。

「とにかく専門家を」という発想は、今から思えばいかにも安易に思えます。カウンセラーを活用するといっても、畑さんのお話にもあったように、専門家におまかせ、という態度では問題は解決されません。これは、私が報告を聞いたカウンセラーも強調していたことです。しかし、どう対処してよいのかわからず戸惑う教員にとって、一つの選択肢に思えたのは確かなのです。

2. なぜ学校に来なければならないのか

「不登校」の生徒を目の前にする教員として最も知りたいのは、このような「不登校」という現象がどうして生じるのか、これに対してどのような姿勢で臨むのがよいのか、ということです。私は、変化していく生徒の生活感情や価値観と、旧態依然とした学校との間にずれが生じていることは明らかで、それが原因ではないかと漠然と考えていましたが、専門家の本を読んで勉強するということまではいきませんでした。高度経済成長による大衆社会の成立や都市化など、現代社会のさまざまな現象との関係のなかで「不登校」という現象を理解しようとする試みがなされていますが、今日は他の角度から考えてみたいと思います。それは、教員として学校に来させる努力をしながらも、心に引っ掛かる一つの問い、「なぜ学校に来るのか？」です。これは、生徒の側から言えば「なぜ学校に行くのか？」ですが、栗田さんが生徒としては問うことができないと言われたものであり、畑さんが話された「学校で学ぶとはどういうことなのか？」という問いにも関わります。

私の勤めていた学校には、学校が大好きな生徒も少なからずいました。が、大多数の生徒は、特に好きではないがそれほど嫌でもない、といったところではないでしょうか。しかし、そんな学校でも、学校になじめず、登校したくなくなる生徒がいるのは不思議ではありません。ある学校特有の雰囲気、たまたま入った学年やクラスの雰囲気になじめないことは大いにあり得ます。また、様々な面倒な規則があります。しかも、学校生活の大部分を占める「勉強」は面白いものではありません。どうして大多数の生徒が学校に来ることができるのか、よく考えてみると不思議なくらいです。

「勉強」が面白くない、と言いきりました。これは、生徒に勉強の意欲がないということではありません。多くの生徒が数学や英語はよく勉強します。放課後塾に行つてまで勉強します。しかし、多くは数学や英語は「主要教科」と称して、大切だから勉強しなければならないということで勉強しているのであって、面白いと感じて勉強している生徒は少ないように見受けられます。その反動が他の教科に表れて、例えば倫理や家庭科を「副教科」と称して勉強しないということになります。これは私が高校生だった頃既にあったことですが。

では、なぜ大多数の生徒は学校に来ることができるのか。一つは、勉強以外に面白いことが色々あるからです。なかでも友人との付き合いは多くの生徒にとって大切なものです。また、クラブ活動に熱中している生徒もかなりいます。しかし、最も大きな力として働いているのは、やはり「学校神話」とでもいうべきものではないでしょうか。「学校には行くものだ」に始まり、「先生の言うことは聞くものだ」というような、教えるものとしての教員と教わるものとしての生徒という役割、さらには、授業中は静かにする、指名されたら答える、ノートをきちんととる、などの細かなことに至るまで、学校にまつわる様々な了解と習慣ができあがっています。この「学校神

話」は少しずつ崩れつつあるように思われますが、「学校には行くものだ」という感覚は依然として強いと思います。

この「学校神話」と微妙な関係にあるのが「受験神話」です。大学に進学することを、それも「よい」大学に進学することを至上の価値とするこの考え方は、私が高校生の頃も世間に浸透していましたが、その力はいっそう強まっているように思われます。進学指導は「受験産業」との付き合いなしに考えることはできず、受験を看板にする塾や予備校に通うことが高校生の文化・風俗の一部となり、先の「主要教科」、「副教科」という割り切りに見られるように、勉強に対する高校生の意識を強く規定しています。この「受験神話」は「学校神話」を強める方向と弱める方向の二つの方向で働いていると思います。「受験神話」は、受験に直結する教科を勉強する動機を与え、受験に熱心な学校へ進学する動機を与えることによって「学校神話」を強めると同時に、受験に直結しない教科や学校生活を無視する風潮を強めることによって、「学校神話」を弱めているように思われるのです。実際、学校は進級規定ぎりぎりの日数まで欠席して、予備校を中心とする受験勉強をする生徒（「不登校」？）も少数ながらいるし、本当はその方が能率的だと思っている生徒はかなりの数にのぼると思います。高校は大学進学に必要な証明書を発行してくれるところでしかないということになります。

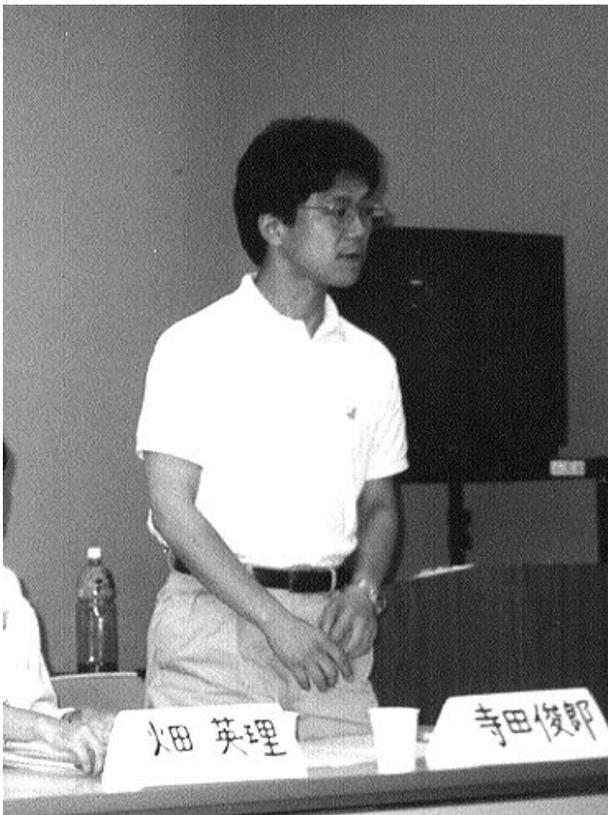
こうしたなかで、受験対応のみが勉強の有効な動機になっています。学校は「なぜ勉強するのか？」という問いに説得力のある答えを与えられないということ、つまり、生徒に学校に行くことを納得させるだけの理由を示せないということです。もちろん、少なからぬ教員が、授業を面白いものにしよう、生徒の知的好奇心に訴えよう、学ぶことの意味を伝えよう、と努力しています。実際に優れた実践をされている先生方もおられます。しかし、個人的な努力のみでは、

生徒にそっぽを向かれてしまい、かろうじて「受験神話」を利用して生徒をこっちに向かせているというのが、多くの教室の現実です。これは、よく言われるような「知育」の偏重などではなく、「知育」の空洞化です。そして、論理的に考えること、他人の考えを理解すること、考えたことをわかりやすく表現すること、など「知的活動」の基本さえ十分トレーニングできないのです。「進学校」だからでしょうか。いや、「進学校」なのに、と私は言いたいのですが。

このような学校にどうして行かなければならないのでしょうか。来させなければならぬのでしょうか。

3. 「なぜ学校に行くのか？」に 答えられるか

「なぜ学校へ行くのか？」といっても、ここまでは「今の学校になぜ行くのか？」という問いでした。この問いは、おのずから、さらに大きな問い、「そもそも学校というも



のになぜ行くのか？」に進みます。

というのは、たとえ「受験神話」が効力を失ったとしても、学校はそれにかわる教育の内実をもっていないからです。先に述べた「知育」の空洞化は、「受験神話」によって引き起こされたのではなく、むしろ「知育」が空洞であったからこそ、そこに「受験神話」が入り込んだのではないのでしょうか。「受験神話」が本来の学校教育を侵食したのではなく、もともと隙間があったところへ「受験神話」が浸透したというのが真相だと思われるのです。今の学校に限らず、我々の知っている学校というものは生徒に学校に来るべき理由を示すことができないように思われるのです。「不登校」という現象は、「なぜ学校というものに行くのか?」「学校で学ぶとはどういうことか?」「何が学ぶに値することか?」といった、学校教育の根本に関わる問いを突き付けていると思います。

誤解のないようにいっておきますが、私がお話したのは、学校はもう形骸化した、機能していない、ということではありません。今も学校で多くの生徒がいい経験をし、成長して卒業していくのです。学校はそれなりに機能し、社会的な役割を果たしています。しかし、だからといって、学校に行く意味があるとはいいきれないこと、学校にいく意味をもっと根本から問い直さなければならないこと、を「不登校」という現象は示している、それが私のお話したかったことです。

(てらだとしろう・博士後期課程)

鷲田(司会):今日は第一回目ですので、皆さんが教育とか学校といった問題に対してどのようなことをお考えなのかとかどうアプローチをしていらっしゃるのかということをお互いに知り合うということ、そして問題の広がりを知ること、そして問題の広がりを知ること、これも大変大事なことで、これは今後、研究会の進め方を考える上でもヒントになることなので、今日はせっかく提題者の方にそれぞれの形で問題を追い詰めてもらっているんですけども、ここでのディスカッションは必ずしも一つの問題の内側にギュッと突っ込んで行くという形にならなくても良いと思います。今日はいろんな同じ問題をいろんな角度から色々主題化して「こういう視点もあるのか」「次はこういうことも考えないといけない」というヒントをみんなで得られたら有り難いという風に考えています。



ディスカッション

discussion

Dis-kurs

不登校は特殊な生徒の問題なのか？

竹内:寺田さんの発表の最後の所で、寺田さんが勤めておられた高校は全部が全部こういった問題に満ち溢れていた学校ではなくて、学校は学校としてちゃんと機能している部分も充分にあったということ強調しておられました。私は(不登校等の問題は)学校の中の特殊な事例だという気がするのです。「そういう子もいて、でもそこにすごく深刻な問題があるみたいだから考えてみよう」というアプローチになると思います。逆に栗田さんは、「とても特殊な生徒」は実はこんなことを考えていたということの報告だったと思います。

だけど、一般的に「学校」というものを考えようとする時には、栗田さんの話されたようなことにばかり関わってもしられない気がします。というのは、話を聞いてると、私がよく分かってなかったのかも知れませんが、たまたま幸運にも自分にとって良い居場所が見つかったり、何かがたまたま楽しく感じられたりしたら問題は何も起こらなかったのかなあと考えてしまったからです。(栗田さんの発表で扱われた問題は)そういった意味でいまいち私の問題にはならないなとか、どういう所を足掛かりにして何を考えて行けばいいの

かなということが不明確になったという気もします。寺田さんが発表の最後で、学校はちゃんと機能しているということを強調されたのを聞いてそう思いました。

「全体として学校が...」というのか、「そういう人もいて」というのか。つまり、学校がどんなものであってもそれに乗って行けない人はいる、ということ考えると「今の学校が...」という問題なのか、そもそも何人かの人を集めてことを起こそうとしたときにはかならず出てくる問題なのか、それが気になりました。

鷲田:学校というものそのものが最初からそういった性格を持っているものなのか、あるいは今の学校の在り方の問題ないし機能不全というものがこういうことを招いてると考えるのか...

寺田:(発表の)最後に、学校はちゃんと機能しているという話をしたのは、私が問題だと感じていることを非常に大きくして話をしたので、これが諸悪の根源で不登校の原因になっているというようにとられる事を恐れてのことです。私は不登校の原因が例えば受験神話だとか、知の空洞化だとかいう話をしたのはではなくて、不登校という現象を考えるとときに、あるいは学校を休みがちになった生徒に「学校に来なさい」「学校に来た方がいいよ」と言うときに、常に気になっていた一つの問題を報告をしたのです。

学校はちゃんと機能していて生徒は多くのことを学んで卒業して行くし、いきいきと活動している生徒もいると言いましたけど、では不登校の生徒達を前にしたときに突き付けられる問題は学校に来ている生徒と無関係ではないだろうということです。

竹内:もう一つ、よろしいですか。最初に、寺田さん・畑さん・栗田さんはそれぞれ先生・親・生徒という立場から話すという説明がありましたが、例えば寺田さんは、学校というものがあって、そして自分はその教員だから生徒を来させなければならぬのだけれども、胸を張って「こうだか



ら学校に来なさい」と上手く言えないので悩んでいたということなのですか。(寺田同意) 栗田さんは「学校というものがある」ということはあまり関係ないということですよ。(栗田同意)「今の」でなくても学校制度というようなものは無くなってくても構わないという点が栗田さんにはありますよね。

栗田：生徒の立場としては所与のものとして学校を捕らえざるを得ないので、シンボリックな意味での 大人 が「学校とはこうあるべき」でそれをどう伝えるかとか、(この問題に関して)「子供にどう接するべきか」といような問いを、やっぱり 子供 の立場からは出せないということ(報告の際の)立場として持ったつもりです。

竹内：とても私には明瞭になりました。

寺田：補足しますが、学校という場には、いろいろ問題もあるし、私が報告したような問題でなくても、もっと小さい部分でもさらに問題は沢山あると思います。例えば、校則とか制服とかあって非常に息苦しいですよ。そういった、学校がほとんど変化していないために生まれる社会とのずれから不登校などの現象が起こっているのかなという漠然とした考えがあります。

不登校の生徒達が苦しみを感じていることはあるだろうし、それはそれで考えなければならないことだと思うのですが、いま学校という場に上手く適応できていて、そこでいろいろな経験をして、いろいろな意味で成長する生徒もいるということは認識しておかなければならないと思います。

ちょっと話が飛びますが、例えば私の勤めていた学校には合唱コンクールというのがありました。男子校で男ばかりで歌うなんて面白くなさそうですが、驚くほどレベルの高い合唱をするんですね。

率先する生徒がいる場合には、全部自分たちで仕切って合唱を作っていて、本格的な合唱組曲なんかをちゃんとやるんです。そうやってゆく中で、例えばリーダーになる生徒はリーダーとしていろいろなことを学ぶわけですよ。そして、それについてゆく生徒たちは自分の役割を果たして協力してゆくということを学び、それに合唱は一人ではできませんから、合唱をやるという中で「みんなじゃないとできないこと」をやる喜びを味わうと思うんです。すごくいい経験だと思います。

でも、一方では合唱にあまり興味がなかったり、合唱のようなみんなで一斉に何かをするということに嫌悪感を持つてる子もいるし、そういう子が多いクラスでは「自主活動への強制」みたいなことになって、これはあまり良くない教育の形態なのではないだろうかと反省することもあるんですね。ですから、伝統とかそういったものによってちゃんと場ができているときには、いつも二重の、つまり一方ではそういった場を利用して良い経験をさせてやりたいと思いながら、でももう一つ下のレベルでは心苦しさを感ずるということがよくあります。

鷲田：さっき竹内君がしてくれた質問というのは、ちょっと言葉を変えて改めて寺田さんに提出するとういうことになると思います。つまり、「学校に行かない」という事態が、今かつてなかったような形で量的にも起こっている。かつては「学校とは行くものである」とか「学校は休まないのが普通である」といった考え方があったと思う。それが今、上手く成り立たなくなっていると考えるときに、規律に従うとか授業中には黙っているとかが人が喋っているときにはこちらは黙って聞くとかが、そういったいわゆる道徳的に基本的なことが、学校とは関係なしに崩れているから学校という場で本来あるべき形が維持できなくなっているとお考えなのか、学校が本来やるべきことをやっていないあるいはできなくなっているから「学校に行かない」という事態が発生しているとお考えなのか、どちらのお考えなのでしょう。

寺田：話をちゃんと聞くとかいったことができていないのは、学校が本来の機能を果たしていないからではなくて、他の要素がいろいろあると思います。社会全体の動向もあるだろうし。さっきもお話したように、学校が本来の姿をしていないから、だから不登校が出てくるだとか遅刻が多いだとか、そういうことではないと思います。

(司会、本間に交代)

「不登校」の位置づけをめぐる

西村：学校で行なわれる教育をあえて学校教育と呼ぶとすれば、学校教育を語る際に不登校というのは一体どういう位置付けで語られるのかというのがまず大きな問題です。学校教育にとって不登校というものが果たして本質的な問題なのだろうかと単純に思うんです。不登校というのはいわゆる集団の教育からあふれ出てしまったというような...

寺田さんにお伺いしたいんですけども、不登校が学校教育の本質的な部分を映し出す鏡として不登校を語っていらっしゃるのか、むしろ、ただ学校教育を語る際の切り口として不登校というものを取り上げておられるのか。提題者の方の共通の理解があたりだと思うので、学校教育のなかでの不登校の位置付けというものをどうお考えなのかということをお尋ねしたいなと思います。

それと、むしろそれを肯定的に読み替えて、学校教育が上手くいってる状態というのはどういうことなのかを、お尋ねしたいと思いますが、それは後に置きます。



寺田：非常に本質的な質問だと思うんですけども、特に公教育の中での不登校の位置付けというのはあまり考えていません。不登校という、数は少ないけれども、不登校ということをお前にしたときに一人の教員として考えざるをえなかったことを語ったので、不登校という現象の学校教育の中の意味とかいうことを突き詰めてこの三人の提題を考えたわけではありません。私自身は、不登校は学校教育を考える上で本質的な問題だと思いま

すが、単なる材料として取り上げることに抵抗があります。特に、畑さんや栗田さんの場合は、学校教育を単なる切り口とか単なるヒントとして取り上げたのではないと思います。

栗田：学校教育の中で不登校の位置づけがどうなっているのか、というのは、位置が高いというのはどういうことなのか、低いとはどういうことなのか、大きく占めているとか、まったくないとはどういうことなのか、それは誰にとって大事な問題なのか、教える側にとってからなのか教えられる側にとってからなのか、どちらの立場からのものとして学校教育という言葉が使われているのかわからないので今の時点では答えられません。

畑：私の場合は不登校という行動を起こしている子供の親という立場から見える学校とか学校教育という視点で話しているの、学校教育という課題設定をしているつもりは初めから比較のないんです。学校教育というものの中から見ると非常に違った見え方をするだろうということは想像がつくんですけど、そういう見方ではなくてむしろ、学校教育っていうと本当は生徒と先生に限定できるはずなのに、不登校という問題が起こると家庭とか親とかその他の社会環境とかがすべてひっくりめられたようなひとつの現象として捉えられる。で、そういうところに身を置いてみたときの学校というのがどういう風に見えるかということです。それが逆にそういう視点からの見え方というのが学校教育とか教育というものの中で少し違った材料になるのではないかって報告したわけです。

高井：私の子供も不登校をしましたので、私は親の立場で話された畑さんのお話が一番良くわかりました。新聞では臨床哲学って身近な生活の問題を哲学するって書いてあって、今日も身近な問題かなって思ったんですけど、私の頭のあたりで蝶が飛んでいるような抽象的な感じでお話聞いていたんです。

高校時代教会にいらしたんですね。その牧師さんがココア飲みに来てくれていたりして、非常に雰囲気が家庭的でした。田舎の小さな教会だから、お婆さんがぼつと一人来ていたりとか、大学の生徒さんが来ていたりするわけですけど、そこには自分の居場所があると思ったんです。というのは世の中の物差しがないんですね。その物差しのない空間でほっとできて、自分にはそ

う空間があるから、あんまり好きではなかったけど中学にも高校にも通い続けられたかなって今にして思うんです。私の息子が中学三年で不登校しましたのは、「学校にはぼくの居場所がない」っていうんですよ。私は不登校はそんな難しい問題とは思っていません。例えば、会社のサラリーマンの方でも行けなくなりますよね。そこには自分が合わないように感じてね。だから、私は居場所が問題じゃないかと思うんです。今の世の中ってみんな物差しで計るから、そのために一生懸命頑張ってるし、勉強していい会社に入ろうと思う人もいるし、そういうのが嫌いだからといってやめる人もいるし...。だから、私はあんまり難しい次元で人を語ってほしくないなって思います。もっと人間のあり方という根本的なもの、そのあたりで彼らは学校には居場所がなかったから、その時点で行かなくなってるだけのことでね。親の立場としては、もっと身近な問題として、不登校をしている子は特別な子だっていう見方じゃなくって研究なり考えるなりしてほしいなと思いました。

栗田：居場所の問題ということでさっき竹内さんがおっしゃってた、居場所がたまたま見つければそれで解決する問題なのか、ということと、いま（高井さんが）おっしゃったことがパラレルな関係にあるなあ...。誰にとっての解決なのかという問題なんだと思うんですよね。はっきりいって、子供の立場で語った私としては居場所がたまたま見つければ確かに解決です。とりあえずあるものとして与えられた教育に右往左往して、例えば、修道院なり通信制の高校なり、さらにここの研究室なりが居場所になって、私の人生の中ではそれは解決していつている、解決しつつあるということは確かで、そこを抜かして語るというのは私もおかしいとは思いません。そういう感覚なくして、つまり不登校の子供を見ずしてマスメディアが語る言説がすごく苦しかったということを言いたいのはそこで、居場所がみつければいいじゃないかという開き直った気分が私の中にあるのも事実です。ただ、こういうディスカッションで親御さんの立場とか先生をしている立場にあるという人の話を聞いて、教える側として何かをしたい、と思うのも、ああそれもあるんだなと思ったのが、正直な感想です。私もそんなに難しい問題として、抽象的な言葉を操って、それでわかったような気になるというのはいやだ、と思います。ただ、...特に寺田さんの話を聞いて感じたことなんですけど、とまどってカウンセラーにも頼って右往左

往している先生の姿ともつながる言葉を持ちたい、そういう先生、ある意味で私のことを理解してくれなかった先生と共通の言葉を持ちたい。私にとっては居場所が見つければOKなんですけれども、そういう先生とも仲良くなりたいという気持ちで私はこのディスカッションに参加したんですけれども、これでお答えになっているのでしょうか。

学校の力が強くなったのか？

西川：今日は不登校という問題で話しが進んでいきますけれども、ぼくは1960年代、高校でまだ学生運動の残り火があった時期にちょっと学生運動に関わりを持ってまして、通常の高校生としてのあり方をせずに、学校と親から「学校やめなさい」と言われたわけですね。で、一度高校を退学して、もう一度高校に行きなおしたわけですけど、二度目の行き方はかなりいい加減なもので、自分の行きたい授業にしかいかず、きっちり規定の三分の一だけは嫌いな授業にも出ると、そういう行き方をしたわけです。で、例えば、学生たちが大学でも高校でも学校という場に対して反抗の時代と、今の不登校という事柄とは何らかの形でつながりがあるんじゃないかと思うんです。ぼくが今の時代であればきっと不登校になってるであろう、と。あの当時はひとつの社会的な問題としてとらえられていたものが今はきわめて個人的なところで論議されている。それは一つには学校の力が強くなってきている、学校そのものがね。以前は、不適応の学生に対しては停学とか退学処分という形で対応してきたわけですが、今はそうじゃなくて不登校の学生をどうするか、カウンセリングでもしてみるか、とかね、全然ちがうでしょ。そのへんの問題が時代の推移の中でどんな風が変わってきたのか、学校というもの、その持っている問題がどんな風に、本当に変質して来ているのか、それとも何がこういう風に形を変えてきているのか、というところを少し議論できたらなあと思うんですけれども。

畑：私も同じ世代で、よくわかります。この研究会を企画した人たちといろんなディスカッションしまして、自分の高校時代のことを話したんですが、安田講堂事件や佐世保にエンタープライズが来て騒然となっていた時代でした、高校紛争というのがあって、職員室ロックアウト40日間、機動

隊が入るか入らないかの瀬戸際、高3は早く試験を受けないと大学受験の内申書が出ません、というような。みんなでデモに行くとき、先生たちが「一人も逮捕されなくて帰ってくるんだぞ」と見送ってくれたりしましてね。栗田さんが、そんなんだったら私は不登校にならなかったんじゃないか、というような話がありました。そのことと私自身の息子の不登校のことと関連させて考えると、今不登校を起こしている子達はまったく横につながらない、個的なんですね。それは彼らが持たないのと、何か持たないようにしくまれているのと両方あるみたいで、だからこそカウンセリングのような解決の仕方が、もっとそういう芽を摘んでしまうというような非常に個的な、生育歴とかにもっていかれるという危惧がありましたね。学生運動のところにはっきりとした反体制の意識がありましたが、今の子はそういう概念を持たない。で、少年犯罪とかいうのも反体制的意識を持たないがために起こっているんじゃないかという気がして、やっぱり個人とか家庭というものと社会とか学校というものの両方に原因があるような気がします。

西川：学校の力はすごく強くなっているね。

畑：すごく強くなっていますね。初めから分断されていて、それで自分が苦しいと感じる仕組みを人と連帯して確認しようということが全然持てないということは、すごく大きいことです。来るなというメッセージというのもあるような気がします。何か外の社会から「来るな」といわれているという感じがあると思うんです。

西川：昔は教師対生徒だとか教師対学生という対立構造とか単純に考えられてきたのに、今はそうじゃなくて、教師も学生も、学校という所は一つの価値観で固まって、それに対して一人で刃向かうという構図になってしまっているところが昔とは違うんじゃないか。学校というのは、今一番、言ってみれば調教するとか、制度的なものとしては完成されている時代なのかなあ、と。だからこそ、そういう問題が不登校という形で個人のレベルで論議されるような問題になってる気がするんですね。それを本当に個人の問題としてどう捉えていこうというのは違うだろうという反省をもつとして、じゃあ何が可能なのか。今、立看板立てても学生なかなか集まりませんよね。では一体、これから何が可能な道として残っているのか。不

登校という生き方が一人の個人の生き方としてじゃなくて何らかの形でまた力を持つことがあるのか。以前の学生運動がどうして挫折したのか、ということも考えないとだめなんですよ。

本間：学校の力が強くなったということばの意味なんですけれども、一方で例えば学校は不登校児を学校の問題として何とか解決したいということでしょうか。

西川：だからですね、かつては、学校のあり方へのアンチ・テーゼみたいな事柄が学校を脅かすような攻撃的な力を持っていて、学校の側もそれに身構える必要があった。今の不登校という形で学校の内側に抱え込まれる問題となっていると思うんですね。

大久保：私は、体制・反体制という捉え方はあまりに図式的過ぎるかなという感じを受けているんですね。学校の側はむしろいろんな要求の前に無限後退しているという感じを非常に強く受けています。だから学校はかつてに比べて、はるかに囲い込む力を失いつつあるのではないかと。自分が教員をやっていたときに周りの同僚を見て、自分が生徒だったころに比べて、なんて物わかりのいい人たちなんだろうと思ってびっくりしたくらいなんです。むしろそれには自分が教員になったという立場の違いもあるんでしょうけれども、少なくとも彼らは自分に与えられた職分の中で、問題に誠実に対応しようとしているという部分があると思います。単純に、囲い込むとか見えない力が強くなったということが言えるのかという感じを受けます。



「連帯」して何かをするということ

寺田：切り込み方がよく分からないのですが、ヒントになるかもしれないのと言うと、例えば生徒会等が何らかの要求を掲げて教員団と対峙するという事はないですね。たまたま活発なメンバーに恵まれていれば、「制服なんとかしてくれ」というような運動が起こることがある。そうしたとき、比較的若い教員はシンパシーを持ちますが、年輩の先生方は、たぶん学生運動のことを思い出すのだと思うのですが、非常に敏感に早くその動きを摘もうとする。

畑：そういうことを知らない、ということもあるのではないのでしょうか。

栗田：連帯というのは、とてもぜいたくなものだと思います。さきほどの合唱コンクールの話が関連してくるのかと思いますが、つまり、共同でなすよるこび、人間が一人ではできないことを追求できるということ、そういったことに対して、私は「自主活動への強制」をととても感じる子どもだったんです。だから、下手に一緒にやらされるくらいなら一人でいたほうがましだと思っていました。連帯するということに、大人はすごく喜びを感じていて、それを味わわせてあげたいと思って私たちにやってくれるのだけれど、それは強制になってしまっている。私は運動会とかもあまり好きではない子どもでした。別にかっこが遅いというような理由ではなくて、束ねられていくのが嫌いだったんです。運動会なんて、生徒の立場から見るとよくわかるのですが、好きな子もいるし、嫌いな子もいます。好きな子もいるということは否定できない、けれど、なぜそうして共同でやらせるのだろうか、ということに答えを出す大人がいなかった。本当に自主的に集まって、演劇をしたり、何かを企画したりするというのは喜びなのだけれど、それをすばらしいものとして大人が語って、「今は失われている」と言われると、子どもの立場ではとてもつらいです。ぜいたくな喜びという感じがします、連帯して動く喜びというのは。

本間：「居場所がない」というのは、例えば、連帯というような場所が見つけれられない、ということなのでしょう。

栗田：「居場所」というのは、連帯までいかない。

一対一でもいいんです。一対一でも連帯といえれば連帯かもしれないのですが。私の中では、一人でもいいからという切実な感覚から居場所という言葉が出てきました。それがもっといっばいできて居場所感覚が得られて、さらにその上で連帯という方に行くというイメージが、私の中では強いです。



「学校」を前提に考えることの問題

土屋：今までのお話はすごく興味深くて、いろいろ考えていたのですが、不登校ということをおのうに、みんなで語り合ってしまうことの問題性、つまり、不登校を通して学校を語るということではなくて、不登校自体がテーマになってしまうこと、不登校をある種の問題として考えてしまうこと自体が不登校に苦しんでいる人をよけいに苦しめてしまうという逆説的なものをすごく感じます。というのは、今日のお話で印象的だったのは、みんなが学校というものに一枚岩の価値観を持っていることで、そこからはずれるとどこにも居場所がなくなってしまう、ということで、この構造をなんとかしなければならぬと思うわけです。けれど、それをなんとかしなければならぬと言った場合に、不登校の語り方が重要になってくる。

たとえば、クラスの三分の二が不登校になってしまったら、不登校は問題ではなくなってしまう気がするのです。少なくともそんなに苦しむものではなくなる。本来、学校にはいろいろな形がありうるはずなのに、しかし我々がイメージする学校というものは、みんな同じだということに問題があるのだと思います。今の制度では小中高といた形できているのですが、学校というものはそもそもこうでないといけぬのか、というあたりを見直していった方がいいのかもしれないという感想を持ちました。たぶん、それは、元締め

である文部省といったところに行き着くのでしょ
うけど、反体制とかいうこととちょっとちがった
意味で、なぜこれほどみんな同じにしてしまうの
だろうというところに、私自身は目を向けたい。

それは学校というのが非常に力を持っていて、
みんなが行くから不登校が逆に問題になってしま
う。それは図と地のようなもので、両方あるのに、
片方だけ、つまり、不登校の方ばかり見ていると、
どんどん苦しくなっていくだろうという気がする。
もっと簡単に言ってしまうと、不登校なんて何が
問題なの、という世界では、不登校は全然苦しく
ない、問題にならないと思います。

徳永：その話でいえば、例えばフリースクール等
ができ初めていますが、それだって今のフリース
クールのあり方は、いわば学校という制度からこ
ぼれ落ちてしまった者への最小限の救済センター
程度の位置づけでしかない。初めから、子どもが
大人になっていくのに学校でなくていいじゃない
か、というぐらいのことを我々は言えないのだろ
うか。例えば、学校というのは、近代化の中で、
制度的にここまで成熟しすぎてしまったのかもし
れないけれど、もとをたどれば、村の小さな寺子
屋とか、西洋では教会とか、そういったレベルで
いくつもチャンネルがあったのが、学校制度とし
て洗練されすぎてしまった。洗練されすぎてし
まったから、枠が決まってしまって、その枠が見
えてしまった人にとってはつらい時代になってき
た。先ほど、土屋さんがおっしゃったことと言え
ば、不登校であることが問題ですらないというよ
うな状況、学校はあるけれども行かないなら行か
ないで大人になる方法はいくらでもある、といっ
た柔らかい土壌をもっと作れないのか。学校の単
位認定といった制度自体は今のままでいいのか、
あるいは、フリースクール的なもので、そこでわ
いわいやっていたら勉強の場になっているといっ
た状況は作れないのか。ですから、もし不登校を
考えるのであれば、学校という枠をどのように改
善していくかということよりも、学校の枠自体を
常識として見るのをやめてしまうことの方が、あ
る意味では、解決ではないか、解決に近づく可能
性があるという気がします。

本間：学校というところを通らないでも大人に
なるとおっしゃいましたが、そうすると、今の
「大人」は学校を通り抜けた、つまり学校のみを通
して作り上げられた「大人」であるということに
なりますね。多元的な大人へのなり方というもの

を、学校というものが一元化しているのだと仮定
して、もしそれが変わるのならば「大人」という
ものも変わることになりますよね。

徳永：変わるでしょうね。だけど、その大人の定
義ははっきりしているわけではなくて、とっさに
使った言葉です。

「学校」から離れて考えられるのか

寺田：(土屋さん、徳永さんに答える形で)学校と
いう枠をはずすと、問題が問題にならなくなるの
ではないか、ということはわかるけれども、実際
に不登校の子を目の前にしては、そこからはじま
らないのではないのでしょうか。

徳永：不登校の子や親は、二重に苦しんでいると
思います。不登校になったことそれ自体と、不登
校になったことが今の社会ではいけないことなの
だ、という罪悪感にです。その二番目の苦しみは
取り除いていけると思います。不登校は悪いこと
なのだと感じなくてもいい雰囲気作りということ
です。そのためには、社会の人々が「そういう気
持ちになるのも無理はない」と言えるようになる
こと、それでも勉強はしたいという人のために、
フリースクールや通信制といった回路づくりを充
実させること、またそのための情報提供などが大
切だし、現実的にしていけることではないでしょ
うか。

本間：そういう雰囲気作りとか、環境をととのえ
るといふこと、栗田さんのおっしゃっておられる
こととは、違う次元のことのような気がするのだ
す。栗田さんは、自分のこの場所を相対化できな
い、ほかの場所、違った仕方で生きることができ
るのではないかと問うことすらできないという
ことをおっしゃったと思うのですが、そのあたり
はどう思われますか。

栗田：(そう問うことは)いまだったら思える、い
まだったら言えると思うことができるのです
が・・・(徳永さんの「それだったら手の出しよう
がない」という発言をうけて)けれどもそういう
感覚、「手の出しようがない」という感覚を持って
いただきたいと思います。なんでも手を出せるの
ではなく、手の出せない部分もある、ということ
です。

馬嶋：現場の先生としては、外側から「学校にはもういなくてもいいんだ」という価値を推進していこうといわれたときに、では教師として現場でどうすればいいのか、ということが見えなくなってしまうのではないかと、思うのですが。

土屋：私はむしろ、そこが落とし穴なのではないか、という気がするのです。つまり教師の側がなんにでも対応しようとするそういうありかたこそ、学校の力を強めてきたのではないかと感じるわけです。

寺田：二枚舌のようにもとられますが、実際生徒を前にしていると、あえてそうせざるをえない、そうしたほうがよい、ということはあるように思います。もちろんそこには欺瞞が入り込む余地も十分あるとは思いますが、難しいことですが、二重の考え方というものを保持せざるを得ない、と思います。そのかわり、生徒と向き合わないもう一つのレベルでは、批判的に考えていかなければならないと思います。

土屋：わたしがいいかかったのは「善意のフォロー」がかえってあだになる、ということです。わたし自身が引きこもりの学生に対して、下宿まで訪ねてみるというようなこともしたのですが、そのときに、こうして彼をフォローしてしまうことで、彼に「行かなければならない」という苦しみをさらに与えてしまう気がしたのです。これは非常に難しいことですが、不登校の子どもの親御さんたちも、みんなが総学校化してしまっていて、何とか学校に行かせてあげよう、という善意でやっていることが逆に（子どもを）からめとっているというところがあるように思われます。

どこかでそういう回路を切らない限り、もう救いようがないのではないかと、思う気がします。

「学校」というものを根本的に問う場

迫：僕も不登校の経験があるのですが、不登校というのは「学校に行きたいけれど行けない」ただそれだけのことではないのであって、僕の場合は

「行きたくない」ということを自分から（学校に）言ったという形です。その際に「なぜ勉強しなくてはならないのか」「なぜ学校に行かなくてはならないのか」という非常にプリミティブな疑問を問う場がない、ということを感じました。そうした問題を問いかける場がない、ということが不登校という問題ではつきつけていられるように感じます。そういうことを突き詰めて考えないと、本当に説得力のある答えが出せないと思うのです。

けれども実際にはそういうことを考えている人を認めてくれる場所がない、というのが現状です。（そういう問いを持って）親の会にいても居場所がない、ということもありました。親の会にでていって思うことは、その場にいる人たちが不登校という問題について考え、悩みたい、と思っっているように見えない、むしろ悩みから逃げたいというふうに見えるということです。



畑：そうしたことは私も感じます。「私が嫌なんです」ということを割と平気で言われる親がおられます。子どもの話ではなくて、自分の愚痴みたいになってしまって、最終的には「この状態が、私は嫌なんです」と言われるのです。結局「学校に行けない子ども」は嫌で、一日も早く「学校に行ける子ども」になって「復活」してほしい、というところからしかものをいっていない、ということはいくつもあるように思います。

けれども学校を相対化できていて、「学校にいかなくても別にいい」と思っていたはずでも、実際に自分の子どもがそうなったら、平然とはしていらなくなるのです。なにか先の見通せない不安というか、もっと根深い問題がそこにはあるように思われます。親が「学校に行かなくてもいいじゃないの」と言ってあげられたとしても、「じゃあどうする」という答えがどこにもない以上、解決にはならないように思われるのですが。

けれども学校を相対化できていて、「学校にいかなくても別にいい」と思っていたはずでも、実際に自分の子どもがそうなったら、平然とはしていらなくなるのです。なにか先の見通せない不安というか、もっと根深い問題がそこにはあるように思われます。親が「学校に行かなくてもいいじゃないの」と言ってあげられたとしても、「じゃあどうする」という答えがどこにもない以上、解決にはならないように思われるのですが。

本間：本日のテーマは、不登校という事象について様々な立場から語ってみることによって、それがどんな一般的な問題をはらんでいるかを考える、ということでしたが、“同じ”不登校という事象が等質な問題設定に決して収まりきらないことがこれまでの議論を通じて明らかになったことだけでも有意義であったと思います。

発表を終えて

振り返って思うこと 言葉にしてみても

栗田 隆子

自分のことを、自分の登校拒否（不登校）のことをこんなにたくさんの人の前で話したのは初めてでした。何かとても大きな仕事をしたあのような、脱力感が残りました。

言葉にして話すことによって「私」の不登校が共通の理解の上での不登校となり、そこから「不登校」という事例となって私の思いも寄らない方向に歩み始めるということ、それは私にとってやはりとても怖いことです。一般的な「不登校」という枠で括られたくはないということは、研究会の中でも述べました。人前で話すことで、何らかの「区切り」を付けるつもりでいたのですが、話し終えた今、「区切り」というより、話した後だからこそ見える「課題」がそれこそ壁のようにぬっと私の前に現れてきました。

私はいま「登校拒否」をしているわけではない。だけど、「登校拒否」からかいま見えた現実のあり方から無関係であるはずもなく、その現実のあり方を「この、今いる場所」から -- 私の場所とは、社会的な位置からみると、大学生であること、二十歳をすぎた「大人」であること、または「女性」であること、日本の国籍を持った人間であること、等々なのですが -- 見つめていくこと、そして「今の、この場での」感受性でしか表現し、記述できないことを意識し、その自分の限界をつねに感じ続けることが、「登校拒否」について考えることに、それはいわゆる、学校問題、社会問題としての「登校拒否」についてだけでなく、子どもの立場や、その感受性から生まれる「登校拒否」について考えることに繋がるができると思うのです。今だからこそ私は「学ぶ」とは何か「知ること」とは何か、さらに「学校」とは何か、を考えたく

思っています。でもあのころの私はそのようなことは、どうでもよく、そのような子どもの立場からの「不登校」を伝えたいと思って話をしたつもりです。「大人」がつくりだした社会とそれについての子どもの感受性や苦しみとの関係を記述していくのはたやすいことではありません。子どもの感受性、というものを大人が描こうとするならばそれは傲慢なことでしょう。子どもの感受性、というものに近づけないのなら、自らの感受性や、苦しみを表出する大人の言葉というものが必要で、それは子どもとの違い、理解し得ないかも知れないという限界を感じつつ、しかし編み出す必要のある言葉なのではないでしょうか。

今の私が話す<「登校拒否」をした私>はその時苦しんだ私のありかたを正確にあらわしているとは言いがたいでしょう。けれども、それを承知で語りたい「私」が存在し、あたかも大人と子どもの越境状態にあるその「私」に突き動かされるように話しをさせてもらいました。

私の話したことに、様々な感想を持たれたことと思います。その感想をきかせてもらえたら嬉しいです。そこから新たな「課題」を眺めながら言葉を紡ぎだしていけたらと思っています。

--「大学卒業厳しく」2000年春入学から --
大学審議会の答申が提出された日、そして38年ぶり横浜ベイスターズ優勝の日に

報告を通して

畑 英理

「息子の不登校」をこんなに大勢の前で語るのは、初めての体験でした。このことが、彼や私たち家族にとって「タブー」であったり、「世間に後ろめたいこと」であったりしたことは一度もないのですが、それでもあくまでプライベート

トなことには変わりなく、その「私的」なことを敢えて語るには、いままでなかった動機が必要でした。それは、この研究会に関わった人みんなの、「臨床的に」哲学を考えようという熱意であり、「不登校」を自分の存在証明と深く関わらせて対象化したいという意欲を持った若い友人たちとの出会いでした。

研究会のなかで同時に報告するパネリストが「本人」「教師」という立場であり、私が「親」という立場で報告するという視点を与えられたことで、この研究会で報告することの「私性」がとてもはっきりしたように思います。

「息子の不登校」を語るとき、私はあくまでも、「彼の親である私」に拘わろうと思いました。「本人」がそのもっとも苦しい場所にもう一度立ち戻って、そこから見えるものを報告してくれる。「教師」が、少し広がりのある視点で、だからこそ内包する一種の「危うさ」を恐れず語ってくれる。その信頼のうえに、私はあくまで「親」として語り、息子に接することで、矛盾に満ちた自分の存在のしかたを知ったことを報告したいと思いました。

けれど「私」に徹する作業をとおして、いままで人に語ることもあった「彼の不登校」は、実は私自身が知らずに彼に「侵入」していて、私でも彼でもないものを語ることがあったように思えてきました。あるいは私にとっては、彼が私を「侵食」していたのかも知れず、親子のように「逃げ場のない」関係の場合、そのような混乱から、この問題がいっそう深くこじれたものになっていく可能性があることを、改めて知らされました。

当日は、「不登校という現象」をとおして、何か共有できるものが見えてくるか、あるいは「不登校」そのものが何か別の見え方をするか、特に、現実には「不登校」のことで苦しんでいる方にも何かひとつでも「発見」できるような場になればいいのだけれど、という過剰な期待もありましたが、そのことについては結論は求めず、これからの研究会の積み重ねに期待したいと思います。

私自身にとっては、報告することで改めてわかったことは大きく、会場からの意見や質問が

多かったことで、この問題に多くの人に関心を寄せていることを痛感しました。回収したアンケートに、「学校に行っている子供も、自身の価値基準などは持っていないのではないか」というご意見がありましたが、確かに初めからそんなものを持っている子供はいないのです。子供が社会化していく過程で、与えられた「価値」を内面化していくわけで、「不登校」の子供たちはその途中で「待った」をかけているのだと思うのです。

質問や意見に十分な時間をとって議論を深めることができなかつたのは残念でしたが、その発言をとおして、それぞれの方の使う言葉が、同じ言葉でありながら、みんな少しづつ意味が違ふことを知りました。そのことが、その言葉を使う人自身の立場を、考え方を、とてもよく表わしていると思います。「私性」に拘わりながらも学問として「普遍的なもの」を求める以上、この差異をむしろ手がかりとして、これからのこの研究会の道程に臨みたいと思います。

一般的な「不登校問題」を考えるのではなく、「私にとっての不登校」あるいは「私の不登校」として考える素材を提供したつもりですが、その試みがどのような結果をもたらすかは、残念ながら今の私の位置から見るとはできません。ひとりひとりが、全ての問題の「自分にとっての意味」の当事者であることを確認できたことを私の喜びとし、この場を共にしてくださった全ての方に感謝します。

980717

参加者からの声より

私は、「不登校のこどもを持つ親」となって5年である。栗田さんが「学校は所与のものとしてあって、＜子供＞の立場からは、問いをだすことはできない」と言われていたのが印象的だった。

私も自分の子供にたいして、最初は「なぜ行かないの？」と尋ねたりして追いつめるようなことをしてしまったという反省がある。それと同時に、親も自分の子供が不登校した瞬間から、学校や周りのひとたちから、いろいろと（家での様子や、生育歴など）聞かれたりアドバイス

されたりと、なぜか“問われる”立場になってしまった。どうして子供が学校に行かないという、一点だけのことで、問う立場（指導する）

問われる（指導される）という関係になってしまうのか？

学校に行っている人の人数が今のところ圧倒的に多く、行っていない者が少数派というだけで、行かないことが異常とされてしまう。不登校は、べつに道徳的、倫理的に悪であるわけではないが、今は何となくそのように思いこまれてしまうようなところがあって、それが親子ともに、特に（大人に比べて弱い立場の）子供にプレッシャーを与え、苦しいところに追いやっている気がする。そういう見方を変えることだけでも、今の不登校の子供たちのしんどさは大きく減少すると思う。そうすれば、子供の方から「なぜ学校にいかねばならないのか？」「勉強する意味は？」とか「こうしてほしい」といえるエネルギーが出てくると思う。その後の

ことは、子供自身が「じゃあこれからどうする」と考えることができると思う。子供にはそれを考える力があると、私は信じている。

学校の力が強くなっているのかどうかという話については、強いとも弱いともどちらでもいえるような気がするが、ただ学校はもちろん、家庭、地域など社会生活が学校化していると思う。親も子供を成績（というより学校生活への適応のうまさ？）で評価する。こどもはどこにも逃げ場がない。遊びでさえも評価される。（例えば休み時間であっても、一人でポツンとしていては、“友達のいない子”と評価されてしまう。）自分でありさえすればそれだけで認めてもらえる場所が誰にでも必要なのではないだろうか？

そういう意味では、今後も、不登校や不登校のこどもそれ自体を論じるのではなく、不登校を通じて見えてくるものは何かを考えていってほしいと思う。（小池啓子）

セクシュアリティに臨む哲学

セクシュアリティ研究会への誘惑
本間直樹

セクシュアリティ（性愛）についての言説はいたるところに蔓延している。私生活についてのお喋り、各種マスメディアにて提供される情報、そして「最新の」科学の知見まで。しかしその一方で、このような情報の洪水のなかで、セクシュアリティについて語ることの困難さはますます深刻になってきてはいまいか。セクシュアリティを語る場はどこにでもあり、どこにもない。

セクシュアリティ、それは、人前で話題にすることが憚れるようなごく私密的な事柄でありながら、同時にすべての人たちにとって免れ得ない普遍的な問題、つまりフーコーの意味で、「個別かつ普遍的」な問題となっている。

もっともセクシュアリティの問題は、何もそれが純粋に「主観的な体験」として個別的であり、同時に「科学的真理」として普遍的であるわけではない。セクシュアリティの客観化はセクシュアリティを語る主体を隠れた

仕方で特権化することであり、逆にセクシュアリティの主観化は語る主体を矮小化することである。

主観的なものであれ、客観的なものであれ、セクシュアリティについての“純粋な記述”はあり得ないのではないか。むしろセクシュアリティについて語ることによって、「語る主体」なるものが常に逆照射されるのであり、そこにこそセクシュアリティについての語りにくさが起因するのだ。

語られた体験の数だけのセクシュアリティがあり、そこから臨床哲学の問いは始まる。例えば、「同性愛」。私たちは「同性愛」と「異性愛」という区別をあたかも自明なものとして扱い、自分をその区別の一方に位置づけようとする。しかし私たちのひとりひとりのセクシュアリティとはこのようなカテゴリーの自明性のなかに安住し得るのだろうか。私たちの「研究会」は差し当たり、日常・非日常に溢れる様々な素材（マンガ・小説・映画）を用いて「セクシュアリティ」との付き合い方を模索する。そして出来れば、毎回この『メチエ』を通じて個々の成果を発表していきたい。（ほんまなおき 助手）

臨床哲学的空間

医療グループ始動！

今年度から大学院が「臨床哲学」研究室という名前になり、臨床哲学の活動も毎週の授業（臨床哲学演習、金曜6:00～）を中心に密度の濃いものになってきた。授業には、哲学・倫理学を専攻する学生・院生、また社会人選抜で入学してきた看護婦や教師の経験を持つ院生の他に、学外から来た様々な職業の人が参加している。そこでは「哲学」と「現場」を交差させるというコンセプトのもとで、「ケア」の概念（前期）や「看護・介護」（後期）について、試行錯誤ながらも活発な議論が展開されつつある。

同時に研究室では、院生を中心に「教育」と「医療」とをそれぞれの個別テーマとした活動グループが形成された。私たち医療グループでは、これまで、医療・看護に関する事例の検討の他、『医療の現場に臨む哲学』の著者である清水哲郎氏の主催する東札幌病院倫理セミナーを見学したり、箕面の老人保健施設ニューライフガラシアにボランティア実習に行ったりした。今後もこうした「実習」を取り入れるかたちで、医療グループの活動が続けられることになるだろう。

グループが活動を始めた時から議論になったのは、医療や看護・介護の「現場」を実際にこの目で見、この身で体験してみなければ何も語れない、ただ現場の人の話を聞いているだけでは十分ではない、ということだった。しかし他方、私たちは現場の人には決してなれない。現場の人でない者が、現場に関わることで何ができるのだろう。そういう者が現場から何か生産的な事柄を引き出すにはどうすればよいのだろう。活動をしながら、私たちは常にこの問題に直面し、頭を悩ませている。（堀江剛 ほりえつよし 博士後期課程）

「ニューライフガラシア」訪問

ボランティアをしたらという声が、現場で働いている人たちから上がっていた。そこで「とりあえず」やってみよう、という気持ちで、西川さんの勤めている老人保健施設（医療行為より日常生活のためのリハビリを重点的に行う）「ニューライフガラシア」へ教員・学生が足を運ぶこととなった。

その日は、一日中、施設の中で右往左往している状態ではあった。社会人学生を抜かしたほとんどは介助についてはビギナーであり、目線を合わせるために姿勢を低くすること、利用者の方の言葉が聞き取ること、食事やトイレの介助のために体を近づけることなど慣れないことも多かった。お世話になった施設の方々には改めて感謝の意を伝えたい。

詳細は何らかの形で発表する予定である。今ここで言えることは、一日だけではわからないことが多い、が、そこでしか感じられない空気があったことも事実であり、そのあり様をどう記述できるかが今後の課題であろう。（森芳周 もりよしちか＋栗田隆子 博士前期課程）

思考錯誤 当研究室発行の『臨床哲学ニューズレター』は、本年より『臨床哲学のメチエ』というより身軽でオープンな情報メディアとして生まれ変わりました。「メチエ」とはフランス語で「仕事、作業、職務、腕前」の意味し、臨床哲学が単なる抽象的な思考だけではなく、様々な人々の協同作業によって営まれていることを表現しています。次回は、第2回研究会（山田潤氏の講演）の報告のほか、医療研究グループの具体的な活動や、セクシュアリティ研究会などのそれぞれの現場でのたくましい(?) 試みを紹介していきたいと思えます。（編集：栗田隆子・高橋綾・寺田俊郎・本間直樹・Apple Power Macintosh G3）

大阪大学文学部 臨床哲学・倫理学研究室
560-0043 大阪府豊中市待兼山1-5
homma@let.osaka-u.ac.jp